

第9話 日本武尊の西伐東征

西に熊襲を討ち、東に蝦夷を平らげて、ますます遠くまで威を及ぼされたが、
凱旋の途中で、俄かにご病気に罹ってお薨れになった。

熊襲 叛く

さて皇室の威光は今や斯うして日本の内地ばかりか、遠く朝鮮の任那にまでも及んだのですが、神代のころに都のあった九州の南の端は、神武天皇が大和に都をお遷ししてから既に長い年月が経って、今は却って都から遠いところとなったために、その地方に住む者の中には、おいおい昔のご恩を忘れた者なども出てきて、第12代景行天皇の御代には、ついに熊襲が叛きました。

一体この熊襲というのは、至って荒々しい種族でして、もとは九州の最も南の端の薩摩や大隈に住んでいたのですが、むやみに他人の物を奪ったり、平気で人を殺したりして、だんだん勢力をひろめて、後には日向（宮崎県）から肥後（熊本県）の南の方にまで蔓って多くの良民を苦しめていたのです。

天皇は大層これをご心配になり、即位の12年についてご自身で兵を率いて九州にまでお降りになり、方々の賊を討ち平らげられて、日向の高屋の宮には更に6年もお留まりになり、その付近の人々を皆安心して暮らせるようになさいました。

日本武尊の征伐

ところが、天皇が都へお帰りになってしまうと、一時鎮まっていた熊襲は忽ちまた頭を擡げて、乱暴を働きました。強い力でぐっと押えればへこんでいますが、手を離せば忽ちはね返るとというのが、こういう野蛮な土賊の習いなのですから、これには天皇も困られた。

たびたびご自身でお出かけになる訳には行かなかったのが、今度は皇子の小碓尊にその征伐をお命じになった。尊はその頃お年は未だ16で、姿は女のようにやさしかったが、力は飽くまでも強く、その上、知恵の優れた方でありました。

仰せを受けると、勇んで兵を率いて、直ちに熊襲の地を指しておいでになり、詳しく賊の様子を探られた。ところが、熊襲の頭目である川上梟師は頗る險阻の地に住んでいて、屋敷のまわりの要害も中々厳しい上に、手下の悪者どもが三重に取巻いて、固く守っていましたが、蟲一匹でも容易に入ることなくぞ出来そうにありません。うっかり攻め寄せて行こうものなら、徒らに味方の兵を損じるにきまっております。

これには尊も困って、討ち入る手段をいろいろと考えておられるうちに、ふと、川上梟師が今度出来上がった新築の家に一族を集めて、その祝いをするということをお聞き込みになった。

川上梟師の最後

それで、尊は、これこそ好い機会であると多いにお喜びになって、今まで結っていた髪を解いて女の子のように長く下げて女の着物を着て、すっかり女の子になりすまして、こっそりと梟師の家の他の女ど

第9話 日本武尊の西伐東征

もの 間に混じって酒宴の席に出られました。 梟師は尊の姿がひとり際立って美しいのを見ると、喜んで自分の側近くに呼んで、しきりに酒を飲ませなどして戯れていましたが、だんだん夜が更けて、客も帰って行き、梟師もついに酔いつぶれました。

その時までこらえにこらえておられた尊は、「おのれ、憎い奴め！」とおぼしめしながら、隠し持った短剣を抜くより早く、梟師の胸を刺された。 梟師はぎょっとして目を開いたが、忽ち頭を下げて、「しばらくお待ちください。 申し上げたいことがあります」と言った。 尊が短剣を留めてお待ちになると、「あなたはどなたです！」と言うので、尊が「われは天皇の御子で名は小碓 尊 という」と言われた。

「私はこの国の中で一番強い者です。 ですから、誰も皆、私には勝てないので、従わない者はありません。 今まで強い者にも大勢逢いましたが、未だ尊のような方はありません。 で、賤しいわたしの賤しい口でお名前を差し上げたいが、お許しくださいますか？」

と言います。 許すと尊が言われると、「どうぞ、今から後は日本武 尊 とおっしゃいませ」と言い終えて、息が絶えました。 その時から小碓 尊 の事を日本で一番強い方であるという意味の日本武 尊 と申し上げるようになったのです。

既に親分の梟師が殺されてしまったので、手下の者らは、人数こそ多かったが、誰も指図をする者がいなかったもので、どうすることも出来ません。 尊が御家来を遣わして攻めさせますと、ひと支えもせず

にわれもわれもと降参して来て、強いといわれた熊襲もここに 全 く平定した。 尊は間もなくそこをお立ちになって、途中の備後（広島県東部）や摂津（兵庫県）で良くない土賊をご征伐になったりしながら、やがて、めでたく大和へお帰りになった。 天皇のご満足はいかほどだったでしょう。 尊のご功績を大いに褒め、いよいよかわいがられました。

東国の蝦夷

ところが、それから凡そ12年ほど経った時に、東の国に蝦夷が起こって、しきりに人々を苦しめているという知らせが朝廷に達したので、天皇は誰か然るべき人を選んでご派遣になろうとしました。

しかし、武勇も知恵も優れた者が外には見当たらなかったため、この重大な任務はまたも日本武 尊 に下された。 尊もこの時はもうお年も28、9歳になって、身の丈は一丈と高く、容貌もすぐれて逞しくなっておられた。

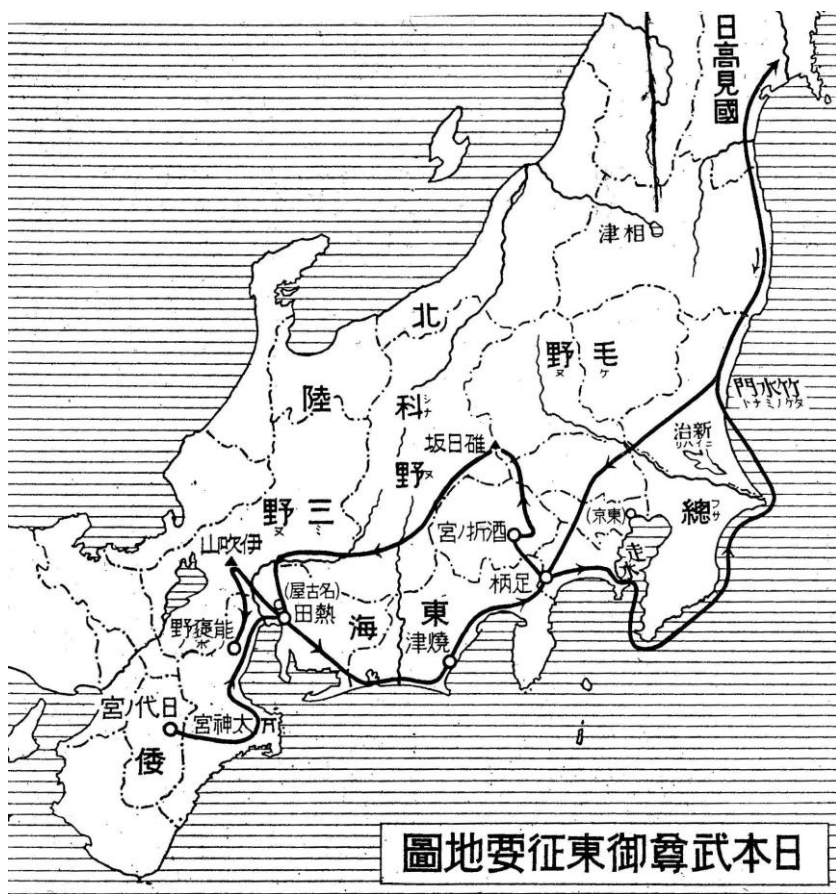
一体この蝦夷というのは、北海道のアイヌと同じ種族でして、勿論われわれ大和民族とも違えば、また、九州の熊襲とも違っていました。 今のアイヌとは全く異なり、その頃の蝦夷は、実に仕方のない野蛮人であったそうです。 男も女も顔や体に入墨をして恐ろしく猛々しい姿を装い、冬は寒いので暖かな洞穴の中に住み、夏は涼しい森や林の間に住んで、鳥や獣を捕ってその肉を食べて、その毛皮を着ていました。

元より礼儀も少なく、恩を受けては忘れるが、恨みは必ず報いるという風で、常に刀や矢などを身に付けて持ち歩いていた。 時には仲間を集めて、良民の住んでいる村を襲って食物などを奪っていき

第9話 日本武尊の西伐東征

ます。攻められれば草叢に隠れ、追えば山に入ってしまう、その走ることの早いことは、鳥・獣かと思われるほどだったそうです。

こういう種族が今の北海道から奥羽地方は勿論、関東地方は利根川辺まで、日本海岸の方は信濃川の辺までも広く住んでいたらしいのです。



尊の蝦夷征伐

さて、日本武尊は天皇の仰せを受けると、直に部下を率いて勇んでご出発になったが、ちょうど道筋にも当たっていたので、伊勢の皇大神宮に参拝せられて、賊徒の平定をお祈りになり、ここで大神にお仕えしている叔母の倭姫命にもお暇乞いをなさいました。

その時、倭姫命は、甥の尊の今度のこのご征伐が、中々大役であることをお知りになって、遠い軍中でののお守りにと、天叢雲の剣を取って尊にお授けになり、

よくよく気をつけて行かれるようにと懇ろにお言葉をも添えられました。

駿河の賊

日本武尊は神剣を賜ったので、一層勢いがよく、やがて軍を進めて駿河（静岡県）にお入りになった。すると、その地の悪者どもは、尊の軍の盛んなのを見て、正面から手向かったのでは逆も敵わないことが分かったので、偽って降参して、計略で尊を殺し奉ろうと思った。大勢で途中までお出迎えして、色々ちそうのほらしかたくさんなぐさしかりをなされてはいかがと行って尊をお誘いした。

そんな卑怯な奴らとはもとよりご存知なかったので、「それは面白かろう」と尊は彼らの言うがままをお信じになって、野原の真中へおいでになると、わる者どもはいつの間にか原の四方に散らばって、一斉に火を放って草を焼き始めた。時は冬の初めのことで、身の丈よりも長い枯草が一面に茫々と蔓っていましたから、火は見る々々八方に燃え広がって凄まじい炎をあげた。

尊は俄かに不思議な火が起こって来たので、どうしたことかと振り返ってご覧になると、遥かな彼方で、わる者どもが手を拍って喜んでいます。さては彼奴らに騙されたのかと初めて気がついて、非常にお怒りになったが、そう言ううちにも火はどんどんと容赦なく煙を巻いて吹き付けて来ます。うかうかして

第9話 日本武尊の西伐東征

いと焼き殺されてしまいます。

それで尊は、腰にお下げになっていた天叢雲の剣を抜いて、四辺の草を薙ぎ払われると、こちらからも焼き立てようと、火打石で火を打ち出して、風に向かって枯草につけられました。すると不思議や、今の今まで尊を包むかと思えていた火の勢いは忽ちその方向を変えて、わる者どもの方へ炎々と燃え返って行きました。

うまく騙したと思って喜んで油断しているわる者どもは、俄かに吹き付けて来た黒煙が一面に濛々と拡がったので、何が何やら分らなくなって逃げ場を失い、まごまごしています。尊がその機に乗じて、勢い鋭く追いまくられたので、火に焼き殺されないものは尊に斬り殺されて、ついにそこで悉く滅びました。

その地は今も焼津といって東海道線の静岡から西へ二つ目の駅の附近に、尊の武勇の後をとどめています。また、天叢雲の剣は、その時、草を薙ぎ払ったので、その後は草薙の剣と改めてお呼び申すこととなりました。

おとたちばなひめ
弟 橘 媛

さて駿河の土賊を平らげられると、尊は進んで相模（神奈川県）に入り、三浦半島から海を渡って上総（千葉県）に赴かれようとした。海岸に立って向こうをご覧になると、上総の山が呼べば答えんばかりに近くに見えます。

「なんだ、これしきの海、飛んで渡れるくらいだ。」何気なく冗談を仰有って、尊は船を出されたが、やがて海の中程まで行くと、忽ち暴風が吹き起こって、大波が立ち、尊の船は木の葉のように揺り上げ揺り降ろされて、今にも沈没しそうになりました。

当時は何事も神様の仕業と考えた時代ですから、その時、お供をしていた妃の弟橘媛は、さっき尊がご冗談を言われたのを海の神さまがお怒りになったのに違いない、と思われました。尊に向かって、「私がお身代わりとなって海神の御心を宥めましょう」と、言い終わったと思うと、身を翻して、逆巻く大波の中へと飛び込まれました。

その為でありましたか、程なく暴風は止んで、海は穏やかになり、お船は無事に上総（千葉県）に着きました。この時、弟橘媛が、夫の一大事の為には命をも惜しまれなかったことは、永く女の道の貴い亀鑑となって、世に称えられています。

さて、尊は更に進んで、上総から常陸（茨城県）を経て陸奥（宮城県）へ向かわれた。今度もまた海路を取られて、お船に大きな鏡をかけて、堂々とした威風をお示しになりながら、浦から浦を伝って蝦夷の国に入られた。

えぞ こうふく
蝦夷の降伏

一方、蝦夷の頭目らは、尊の軍勢がずっと近くに寄るのを待って、ただ一気に射て追い返そうと、大勢の手下を率いて海岸に陣取っていた。ところが、だんだん近づいて来る尊の船を見ると、その勢いがい

第9話 日本武尊の西伐東征

かにも盛^{さか}んで、逆^{とて}も勝^かてそうな気がしなかったので、忽^{たちま}ち彼らは弓矢^{ゆみや}を捨てて、地^すに平伏^{ち ひれふ}して尊^{おが}の方を拝^{おが}みながら、「謹^{つつし}んでお姿^{すがた}を見奉^{み たてまつ}るに、ただのお方^{かた}とは思えませんが。もしや神^{おも}さまではありませんか？ お名前^{なまえ}をお聞^きかせ下さい」と言った。

それで尊^{おが}が、おごそかなお声^{こえ}を上げて「われは現人神^{あらひとがみ}でおわす天皇^{おお}の子であるぞ」と仰^{おほ}せられると、
悉^{ことごと}く蝦夷^{えぞ}らは恐れ入^{おそ}って、ぶるぶる震^{ふる}える者もいた。



あしがら
神奈川 足柄山付近

おととたちばなひめ なつ やまとたけるのみこと
弟 橘 媛 を思い懐かしまれる日本武 尊

「海に入って船を岸に付ける手伝いをせよ」と尊がつづけて仰せられると、蝦夷らは急いで着物を捲り上げて、ざぶざぶと波を分けて、船を引いて岸にお着けした。

尊は上陸なされると、そこに平伏している一同を改めてご覧になったが、反抗するものは討ち、なつて来る者は撫育する、というのがわが皇室の大昔からのご方針でした。則ち悉くその罪を許されて、今までの不心得を論し、頭目らを捕虜として部下にお加えになっただけで、他の者は皆赦しておやりになった。

あづまはや

斯うして蝦夷が全く平らぐと、帰途は陸路を常陸から武蔵（埼玉県、東京都）にとって、相模（神奈川県）の足柄山にかかられた。その峠の頂に登られた時に、東国もいよいよこれで見納めだと思うので、振り返ってご覧になると、相模の海が日に光って白く見えています。

おお、往きにご一緒にここを越えられた弟橘媛が、あの海に沈まれたかとおぼしめし出でられると、尊は思わず、「あづまはや」とご嘆息なされました。

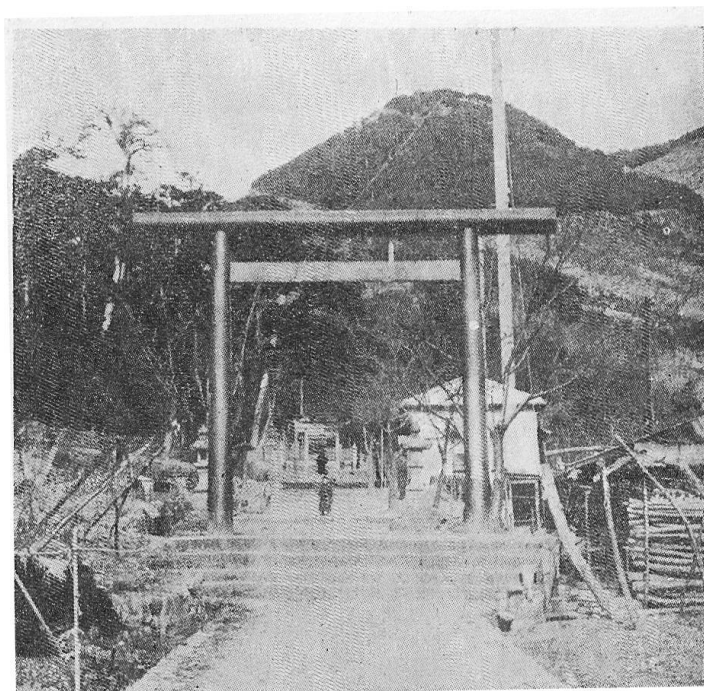
その意味は、「あが（我が）妻よ」ということですが、このお言葉の中には、実に、亡くなられた姫の事を、悲しく、懐かしくおぼしめし出でられた尊のご胸中が一杯になっているのです。

さぞその時のお供のものらも涙に袖を濡らしたことであったでしょう！東国をあづまの国というのは、これから始まったのだと伝えられています。

伊吹山の賊

尊はそこから甲斐（山梨県）に入って、酒折の宮（今も甲府市の東にその宮がある）に暫くお駐りになってから、信濃（長野県）、美濃（岐阜県）を経て、尾張（愛知県）に出られ、尾張の国造の尾張氏の所にご滞在になっていました。

しかし、近江（滋賀県）の伊吹山にわる者がいるとお聞きになって、序にそれもお征伐なさろうと、草薙の剣は尾張氏の所にお預けになったままで伊吹山へ向かわれた。



山梨 酒折の宮

ところが、不幸にも尊はその山中で御病気に罹られたので、よんどころなく引返されました。今は早く都へお帰りになろうと、路を伊勢に取ってお急ぎになり、杖にすがって漸く伊勢の能褒野という処までお着きになった。お体の痛みが烈しく、そこからは一步もお進みになれなかったのです、今はこれまでもとご覚悟をなされ、蝦夷の捕虜は皇大神宮に奉り、又、使いを大和に遣わして、東国の平定したこと

第9話 日本武尊の西伐東征

を父景行天皇に奏上されて、ついにこの地でお薨れになった。時に御年32でした。

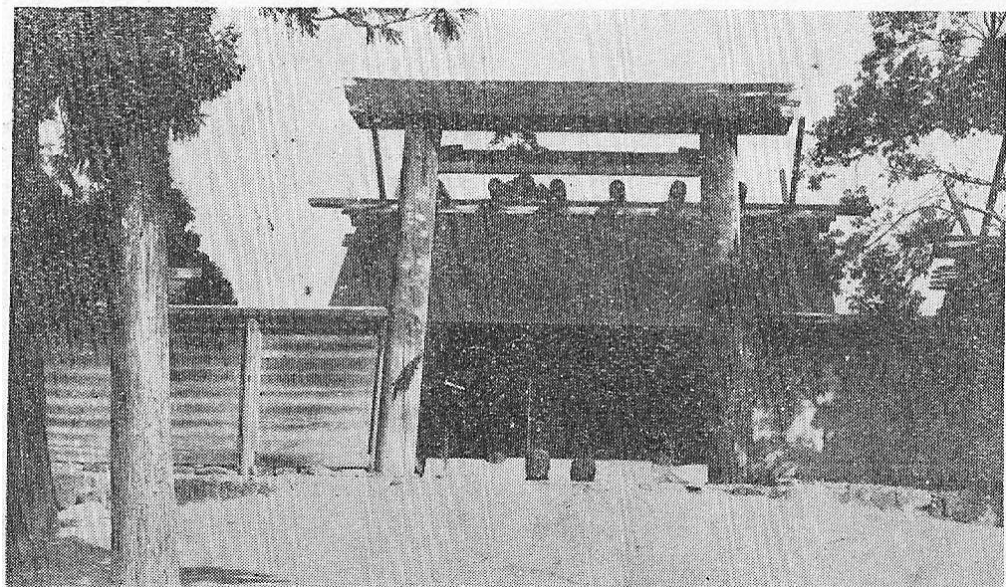
これをお聞きになった天皇のお嘆きはいかばかりであったでしょう。数多いお子の中で最もかわいがられていた小碓尊を、他にご派遣になるほどの者がいなかったればこそ、遠く野蛮な蝦夷の国へまでもおやりになったのです。一日としてそのご安否をお思いにならない日とはなく、朝に夕にお還りになるのを今か今かとお待ちになっておられたのに、何の禍いか、何の罪か、その可愛い小碓尊は永久にお帰りにならないことになってしまったのです。

天皇はお寝になってもお眠りになれず、物を召し上がろうにも召上がられず、昼も夜もお歎きになって、「ああ、今から後は、誰と共に天下を治めようぞ！」とまで仰せられた。が、その悲しみの中にも、ご臣下を伊勢にお遣わしになって、能褒野に厚く尊を葬られました。ところが、いよいよご遺骸を埋め奉ろうとした時に、お墓の中からぱっと白い鳥が舞い出して、大和を指して飛んでいったというので、尊の御陵を白鳥の御陵と申し上げています。

ああ、尊はやがて天皇の御位をもお継ぎになるべき尊い御身を以って、少年の時から、西に東に、遠く蛮族の征伐に赴かれました。兵士と共に艱難を重ね、つぶさに辛酸をなめさせられて、今やめでたく都に凱旋なさろうとした時になって俄かにおかくれになったのであります。まことに長い極みではありませんか。

また、草薙の剣は、尊がお預けになったまま尾張氏のところに止められていましたが、後にその地に社を建ててお祀りすることとなりました。

今、名古屋市熱田に在る官幣大社熱田神宮がそれです。



名古屋

熱田神宮

(第9話 日本武尊の西伐東征 終わり。

次は前頁に戻り、第10話 神功皇后の三韓征伐へ)